

小学校 外国語活動 部会

部会長 大任町立大任小学校 校長 杉原 哲彌
実践者 川崎町立池尻小学校 教諭 西畑 いせ

1 研究主題

積極的にコミュニケーションを行う外国語活動の在り方
～状況に応じたshow and tellを取り入れた活動構成の工夫を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められるとともに、人材育成の面での国際競争力も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つになっている。社会のグローバル化はますます進展していくことが予想され、人・モノ・情報がダイナミックに往還する中で世界を意識しないで生きていける時代は終わりつつあるといえる。最近では自分自身が外国に出て行かなくても、外国人の増加により日本国内においても異言語・異文化間のコミュニケーション能力の必要性が高まってきている。そのような社会の変化に伴って、従来の英語教育を見直し、コミュニケーション能力の向上を目指した外国語教育の改革を求める気運が高まってきた。

さらにこのような状況の中、外国語教育は中学校から導入される学習であったが、聞くこと及び話すこと、読むこと及び書くことの4技能を一度に取り扱う点に指導上の難しさがあるとの指摘があった。現代社会の変容と、外国語教育入門期の課題を踏まえれば、小学校段階で外国語に触れたり、外国語を使って体験したりする活動を設定することは、中・高等学校における外国語教育の基盤となるとともに、将来におけるコミュニケーション能力の育成に役立つと考えられる。

(2) 外国語活動のねらいから

外国語活動の目標は、コミュニケーション能力の素地を養うことにあり、①「外国語活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること」、②「外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」、③「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」の3つの柱からなる。

これら3つの柱は中央教育審議会の答申の中の「小学校段階における外国語活動」の中で具体的な性格が述べられている。それは「小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しにするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることをも目標として、外国語活動を行うことが適当と考えられる」こと、また「外国語活動を行うに当たっては、身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、ALTの活用等を通して、英語でのコミュニケーションを体験させるとともに、場面やテーマに応じた基本的な表現や単語を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させることを基本とすることが適当である。なお日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現に慣れ

親しませることは、言葉の大切さや豊かさ等に気づかせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身につけさせることにつながるものであり、国語に関する能力の向上に資するものと考えられる」ことである。

このように、小学校外国語活動で目指しているものは、単に「話すこと」「聞くこと」のスキル面を向上させるものではない。子どもたちの大きな課題の1つであるコミュニケーション能力の向上と、言葉の大切さや豊かさ気づかせること、そして日本文化を中心に国際理解面について体験を通して具体的に気づかせようとするものである。これらのことから、外国語活動においてコミュニケーションのよさを味わわせることは意義深いと考える。

3 主題の意味

(1) 「積極的にコミュニケーションを行う外国語活動」とは

コミュニケーションとは、課題解決に必要な情報を得るために、話し手と聞き手が互いに情報を送ったり受け取ったりするやりとりを通して、意見・情報を共有するなかで、共通認識を図っていく過程のことである。

積極的にコミュニケーションを行うとは、子どもたちが活動に目的をもち、共通の目的をもつ他者に進んで働きかけながら、互いに情報を共有し、共通認識を図っていこうと自分の情報を伝えたり、相手の情報を受け取ったりするために、慣れ親しんだ表現や語彙を使って、相手と意志疎通を図ることである。そのためには次の要素が必要となる。①慣れ親しんだ英語を用いて、伝え合いたいという意欲をもつこと（目的性）②活動の中で状況に応じて表現や語彙を選びながら使うこと（創造性）③活動を振り返り、コミュニケーションへの達成感をもつこと（有用性）である。

積極的にコミュニケーションを行う外国語活動とは、目的性・創造性・有用性を大切に、自分から他者に働きかけてコミュニケーションしていく外国語活動である。具体的に次のような子どもの姿を目指していく。

①目的性	目的意識をもち、共通の目的をもつ他者に自ら働きかけ、積極的に友達の考えを聞いたり自分の考えを話したりすること
②創造性	相手の言いたいことが何なのか考えたり、自分の伝えたいことを伝えるために慣れ親しんだ表現や語彙を使って、言語や非言語を組み合わせるなど思考して伝えること
③有用性	友達とコミュニケーションを図ることで、伝わったという達成感をもつとともに、言語や非言語で伝えるよさを実感したり、自分や友達のよさに気づくこと

3つの特性をそれぞれ独立してはぐくむのではなく、それぞれを関連づけて相互作用的にはぐくんでいくことが重要であると考え。相互作用的にはぐくむことで相乗効果が期待でき、次の活動への意欲の高まりにつながるからである。そのために、子どもが自分の伝えたことをもとに、どんな気づきや新しい発見があったのかを繰り返し認識できるような活動を展開する必要があると考える。

(2) 状況に応じたshow and tellを取り入れた活動構成の工夫とは

状況とは、時、場所、課題などが変わっていく、その時その時の様子であり、子どもの置かれている、さまざまな環境の有様のことである。外国語活動においては、様々な活動を行う中で、子どもが達成すべき課題があり、その課題解決にむけて子どもたちが直面する場や

活動内容などの外的な環境のことである。活動の中で状況は以下のように変容していく。

まず、表現や語彙を知る状況。次に、慣れ親しんだ表現や語彙を使って自力解決を行う状況。最後に、慣れ親しんだ表現や語彙を使って、友だちと協力しながら課題解決を行う状況である。

状況に応じた show and tell とは、教師に思いを伝える活動（show and tell ①）、自分の伝えたいことを他者に伝える活動（show and tell ②）、友だちとの相互理解を得た上で自分の伝えたいことを他者に伝える活動（show and tell ③）であり、伝え合う対象や形態が異なる3つの活動である。この show and tell には3つの価値を見い出すことができる。1点目は、実際に言語を用いてコミュニケーションを行う体験を通して、それらの大切さに気付かせることができること、2点目は、自分から他者にはたらきかける状況がうまれること、3点目は、活動が誰にでも簡単にコミュニケーションできるものであり、教師主導型ではなく、児童主導型で活動に取り組むことができることである。

状況に応じた show and tell を取り入れた活動構成の工夫とは、show and tell ①の体験が show and tell ②で活かされたり、show and tell ②の体験が show and tell ③で活かされたり、show and tell ③と合わせて前回よりも活発な show and tell ②を行ったりするなど、活動してきたことが後に活かされるスパイラル型の活動構成である。

これらの活動を展開するために、コミュニケーション活動において、「使う」段階では興味関心を高める活動を、そして「使いなれる」段階では、自分の力で課題を解決する活動へ、そして最後に「使いこなす」段階では、課題解決に向けて友だちと協力する状況へと段階的に変化させていく。活動の最初は子どもには目的はない。だから最初に興味関心をもつ外国の文化や言葉にふれさせ、「やってみたい」という目的をもたせる。そして最初に慣れ親しんだ表現を使って、「自分の力でやってみたい」という目的をもたせる。最後に自分が単元で培ったコミュニケーション能力を駆使して、「友だちと一緒にやってみたい」という目的をもたせる。これらの活動を段階的に仕組み、課題解決を行うことにより自己理解から他者理解へと広がっていくと考える。

この単元構成を、「目的性」「創造性」「有用性」の3つの特性を大切に展開することで、コミュニケーションのよさを味わうことができる外国語活動になるのではないかと考える。

（3）具体的な方途

本研究では、外国語活動を通して積極的にコミュニケーションを図る子どもが育つために、自己理解や他者理解を深めることができるように共通の課題達成のための目標をもたせることや、単元全体及び1単位時間で行う段階的な活動構成の位置づけを行う。

① 興味・関心を高め目的を見いだすことができる教材化の工夫

子どもが意欲的に課題を追究していくためには、事象との出会いにより、自分の課題として認識し、切実な課題が生まれ、必然性のある強い目的意識をもたせることが重要である。その中で生じた意欲を原動力とし、コミュニケーションを図ることができると思う。これらの点を考慮して以下の3点で教材化を行う。

① 子どもたちの日常生活に身近なもの
② 自分たちの意志・判断が課題解決に必要なもの

③ コミュニケーションの足跡が見えるもの

以上3点で、興味・関心を高め目的を見出すことができるようにする。

② 目的に応じて状況設定を行う段階的な活動構成の工夫

単元全体を通して、子どもが積極的に友達とコミュニケーションを図ることができるように、「使う・使いなれる・使いこなす」という段階的な活動構成を仕組む。

まず「使う段階」では、その単元に必要な基本的な表現や語彙を明確にすることと単元の活動内容への見通しを明確にすることをねらう。単元で使用する表現や語彙を明確にすることは、子どもが今後の活動に見通しをもつことができるようになり、安心して活動できるようになると考える。また活動内容への見通しでは、日常の身近な場面や子どもの興味・関心のある事象を提示し、「面白そう」「やってみたい」「自分でもできそう」という意欲を喚起させることで、その単元の活動内容でコミュニケーションを図ろうとする動機づけを図るものである。次に「使いなれる」段階では、「使う段階」で慣れ親しんだ表現や語彙を使って課題に取り組み、自分のコミュニケーション能力に自信をもつことをねらう。「自分の力で表現できたな。」「相手に伝わってうれしいな」と感じさせる活動である。そのために、自力で課題解決できる教材を準備し、それをもとに友達とコミュニケーションを図る活動を仕組む。最後に「使いこなす段階」では、使えるようになった表現や語彙を使いこなしながら友達と協力してコミュニケーションを図り、状況に応じて表現や語彙を選びながら使うことや自分の性格の再確認や友達のよさに気づくことをねらう。「このときには、こっちの表現の方がいいかな。」「英語でも自分の考えていることを伝えることができるんだな。」「〇〇君と一緒に活動すると楽しいな。」「〇〇さんって、こんなところがあるんだ。」「僕は～ことができるんだな。」と感じさせる活動である。

	使う段階	使いなれる段階	使いこなす段階
役割	単元に必要な基本的な表現や語彙を明確にすることと単元の活動内容への見通しを明確にする。	慣れ親しんだ表現や語彙を使って課題に取り組み、英語を使うことで自分についての理解を深める。	使えるようになった表現や語彙を使いこなしながら友達と協力してコミュニケーションを図り、伝え合うことのよさを理解する。
手立て	・興味関心をもつ外国の文化や言葉にふれさせる。	・自力で課題解決できる教材の準備や振り返りシート	・自分のよさや友達のよさに気づくことができる振り返りシート

③ 自己理解や他者理解につながる評価活動の位置づけ

自己理解や他者理解を単元を通して感じることができるように、評価活動を位置づける。それぞれ1単位時間の終末には、子どもの言葉のかけ合い、ワークシートへの記入、教師による評価を活動の目的に即して具体的な内容で行う。

4 研究の目標

積極的にコミュニケーションを行う児童を育成するために、状況に応じたshow and tellを取り入れた活動構成の工夫の在り方について究明する。

5 研究仮説

外国語活動の学習指導において、状況に応じたshow and tellを取り入れた活動構成を工夫すれば、積極的にコミュニケーションを行う児童が育つであろう。

[仮説実証のための着眼点]

- ① 興味・関心を高め目的を見いだすことができる教材化の工夫と目的に応じて状況設定を行う段階的な活動構成の工夫を行い、それぞれの段階で効果的なshow and tellを行う。
- ② 児童の具体的な姿をとらえ、どう指導すればよいかを明確にするため、単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定し、行動観察用のチェックリスト（指導者用）、振り返りカード（児童用）を作成する。

6 授業の計画

(1) 単元 Let's go to Italy. 友だちを旅行にさそおう

(2) 単元の目標及び指導計画

単元	Let's go to Italy. 友だちを旅行にさそおう	総時数	4 時間	時期	12 月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の思いがはっきり伝わるように、おすすめの国について発表したり、友だちの発表を積極的に聞いたりしようとする。(コミュニケーション) ○ 行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。(慣れ親しみ) ○ 世界には様々な人たちが様々な生活をしていることに気づく。(言語や文化) 				
時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点		
1	国名の言い方を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国旗あてゲーム ・ 国旗クイズをつくろう 【show and tell ①】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語と英語での国名の言い方の違いに気づかせる。 		
2	行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャンツ Let's go to Italy. ・ どの国の世界遺産か聞き取ろう ・ 行きたい国をインタビューしよう 【show and tell ①】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本と世界の世界遺産にふれることで、外国の文化に対する理解を深めさせる。 		
3	おすすめの国について自分の思いが伝わるように発表の練習をしたり、友だちの発表を聞いたりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャンツ Let's go to Italy. ・ 行きたい国と行きたい理由を聞き取ろう ・ おすすめの国を紹介しよう 【show and tell ②】	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションが成立するように、その方法と内容を明確に提示する。 		
4	世界には様々な人たちが様々な生活をしていることに気づくとともに、自分の思いが伝わるように発表したり、友だちの発表を聞いたりする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャンツ Let's go to Italy. ・ おすすめの国を紹介し合おう 【show and tell ③】	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時までのインフォメーションギャップを整理し、外国の文化だけでなく、他者理解も深めさせる。 		

7 指導の実際

児童の活動	H R Tの支援	評 価
<p>[Warming up]</p> <p>1 はじめの挨拶をする Hello, Ms. ～. I'm ～, thank you. And you?</p> <p>2 チャンツ ♪ Let's play Italy. ♪をする。</p> <p>3 めあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>めあて おすすめの国とその理由 をペアで紹介し合おう。</p> </div> <p>[Main activities]</p> <p>4 聞き取り「おすすめの国 を紹介しよう」をする。 ○ 音声教材を聞き、行き たい国と行きたい理由を 聞き取り、テキストに書く。</p> <p>5 おすすめの国とその理由 について試しの show and tell をする。 ○ ペアでおすすめの国を 紹介する。</p> <p>[Looking back]</p> <p>5 本時の振り返りをする。 ○ 振り返りカードに、今 日の活動で頑張ったこと やできるようになったこと を書く。 ○ 感想を発表する。</p>	<p>[Warming up]</p> <p>○ 笑顔で気楽な雰囲気をつくり ね挨拶をする。 Hello everyone. How are you today?</p> <p>○ 子どもと一緒にチャンツを行う。</p> <p>○ めあてを確認させ、おすすめ の国の show and tell をするとい う意欲を高める。</p> <p>[Main activities]</p> <p>○ 音声教材を聞かせ、わかった ことを書き込ませる。 ○ show and tell で使う表現を取 り上げて練習を行う。</p> <p>○ 相手に良く伝わる伝え方（声 の大きさ、アイコンタクト、ジェ スチャーなど）について確認する。 ○ 2ペアずつ4つのグループに なり、それぞれの show and tell を聞き合わせる。 ○ ジェスチャーやよく知っている 英語を使って分かりやすく show and tell をしているペアや アドバイスをしているペア・グ ループがいたら全体に紹介する。</p> <p>[Looking back]</p> <p>○ がんばったことを認め、次時 への活動へ意欲をつなぐ。 ○ できるだけ多くの児童に発言 させる。 ○ 終わりの挨拶をする。</p>	<p>○ 国名とその理 由を聞き取る ことができた か。 (書き込み)</p> <p>○ 相手に良く伝 わる話し方(声 の大きさ、ア イコンタクト、 ジェスチャー) で show and tell できたか。 (行動観察)</p> <p>○ 聞き手の方を しっかり見て show and tell を 聞くことがで きたか。 (行動観察)</p>

6 終わりの挨拶をする。 Thank you. Goodbye, Ms. ~. See you.	That's all for today. Goodbye. See you.	
---	---	--

8 本時授業の結果と考察

導入の段階で、本時の流れを示すと共に「2組の友だちにおすすめの国を紹介するための練習をする」という本時のねらいを示した。このことにより、子どもたちは、次時学習を意識し、本時への学習意欲を高めていた。

展開の前半では、“Let's go to ~.” “You can see ~/eat ~.”等の表現に慣れるためにチャンツや前時に学習した音声教材を使って、発声練習をした。

メインの活動では、show and tellの内容とそのとき使うの英語表現を一つずつ確認していった。内容と表現を確認しながら合わせて板書をしていったので子ども達は、show and tellの順序についてはよく分かっていた。しかし、2ペアずつになりshow and tellの練習になったとき、子ども達が、「～は、英語で何と言ったらいいですか？」とか「～は、…でいいですか？」と質問してきた。show and tellにすぐに入らず、このような質問をしてきた原因として、自分の伝えたいことの英語表現を調べる時間を前時まで十分に確保できていなかったことが考えられる。さらに、展開の前半で行うチャンツをテキスト通りではなく、自分が紹介したい国名や観光地・食べ物などにアレンジして行うなどの工夫をし、たくさん声を出してから、メイン活動のshow and tellに入れば良かったと考える。

ペア通しでのshow and tellが終わったところで、知っている英語を付け加えてshow and tellをしているグループとジェスチャーをつけてshow and tellをしているグループを紹介した。子ども達は、相手によく伝わるようなshow and tellとはどんなshow and tellなのか具体的に理解できたようで、後半、違うペア通しでshow and tellをしたとき、ジェスチャーをつけたり知っている単語を付け加えたりしてshow and tellをしている姿が見られた。

本時の評価については、「相手によく伝わる話し方（声の大きさ・アイコンタクトジェスチャー）でshow and tellができたか」「話し手の方をしっかりと見てshow and tellを聞くことができたか」について、行動観察により評価を行った。また、児童はふり返りカードにより、①楽しく活動できたか。②はっきりした声で話せたか。③相手の方を見て話したり聞いたりできたか④進んで活動できたか。の4項目について「よくできた」「できた」「できなかった」で自己評価し、本時の活動の感想（会話の楽しさや友だちのいいところ・新発見など）を書かせた。

ほとんどの児童が、4項目とも「よくできた」「できた」としていた。②③④の項目で2名「できなかった」とした子どもがいた。できないとした理由は「はずかしかった。」ということだった。恥ずかしくても、それを乗り越えることができるように、発音練習の時間を確保し、自信をもたせてから、メインの活動に入るように時間配分や活動のやり方の工夫を行っていかねばならないと考える。

本時の感想の中に「恥ずかしかったけど、がんばって紹介した。」「おすすめの国のことが分かった。」「緊張したけど、楽しかった。」「次は、2組に紹介するので、分かやすく伝えたい。」「分からなかった言葉が分かった。」といったことが書かれており、子ども

たちが、楽しく show and tell 活動を行うことができていたことが分かった。

9 成果と今後の課題

(1) 成果

- ① 単元及び一単位時間の学習展開の中に、自分が伝えたいことを伝える活動や自分や相手のことを互いに伝え合うという目的のある活動を位置づけ、めあてを具体的に提示したこと、また、授業形態を1組・2組合同の場合と分割の場合というように工夫したことは、誰に対して伝えるのかという相手意識を強くもたせることができ、自分の話が伝わったり相手の話が理解できたりした喜びをもたせることができた。また、もっと聞きたい伝えたいという知的好奇心をもたせることにつながった。その結果、外国語を使ってコミュニケーションをすることの楽しさを感じたことが子ども達の振り返りから明らかになった。
- ② 単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定し、それに沿った児童用の振り返りカードを作成し活用したことは、子どもたちが活動にどのような思いで取り組んだのかがわかり、有効であった。また、1単元分の振り返りカードを1時間目にまとめて配付したことで、子どもたちが単元の流れをつかみ、活動の見通しをもつとともに、毎時間の自分の伸びを自覚することができたようであった。

(2) 課題

- ① 子どもの興味・関心や学級の特性をふまえ、全ての子どもが、自分の考えや思いを基に積極的にコミュニケーションをすることができるようにする教材の開発と単元構成の在り方。
6年生では、5年生との活動内容の連携。
- ② 評価の観点に沿った、評価規準の設定。
教師が、関心・意欲・態度を見取るために行動観察の際に用いるチェックリストの作成や、児童が、外国語を使った、コミュニケーションの楽しさを実感できる振り返りカードの作成とその分析の在り方。

○ 参考文献

- 1 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」 東洋館出版社 平成20年
- 2 文部科学省 「中学校学習指導要領解説 外国語学習編」 ぎょうせい 平成20年
- 3 安彦 忠彦ほか 「現代学校教育大事典」 ぎょうせい 平成14年
- 4 林 忠幸 「体験的活動の理論と展開」 東信堂 平成13年
- 5 末田 清子・福田 浩子 共著 「コミュニケーション学」 松柏社 平成15年
- 6 金森 強 編著 「小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践」 教育出版 平成15年
- 7 大城 賢・直山 木綿子 編著 「学習指導要領の解説と展開」 教育出版 平成20年
- 8 波多野 諠余夫ほか 「コミュニケーションと思考」 岩波書店 平成13年
- 9 J.B.ベンジャミン 「コミュニケーション 話すこと・聞くことを中心に」 二瓶社 平成4年
- 10 樋口 忠彦ほか 編 「小学校英語教育への展開」 研究者 平成22年
- 11 樋口 忠彦ほか 編 「これからの小学校英語教育—理論と実践—」 研究社 平成17年
- 12 バトラー後藤 裕子 「日本の小学校英語を考える」 三省堂 平成17年